令和４年度考古学講座第２回「十瓶山窯跡群における窯業生産の展開」

谷本　峻也

はじめに

十瓶山窯跡群は綾川町陶を中心として、約４ｋｍ四方の範囲内に約 120 基の窯跡が分布する四国最大の窯跡群である（図１）。古代から生産を継続してきた当窯跡群は、讃岐国が『延喜式』で定められた須恵器の調納国であったこともあり、古くから注目されてきた。

十瓶山窯跡群における調査・研究は寺田貞次による分布調査（寺田 1941）に始まり、田村久雄による分布調査や香川県教育委員会や同志社大学による発掘調査（香川県教育委員会 1968、森・伊藤 1971）が実施された。これらの調査や以降の調査の成果をもとに、森浩一や渡部明夫らによる編年作業が行われている（森・伊藤 1971、渡部 1980、廣瀬 1982、片桐 1992）。その後、佐藤竜馬は編年、分布など多岐にわたって検討を行い（佐藤竜 1993・1994・1996・2000c など）、研究状況を大きく進展させた。以後も資料の蓄積は続き、近年では渡部や森下英治による瓦生産の再検討（渡部 2008・森下 2019）や佐藤による生産地資料と消費地資料を含めた香川県内出土土器の様相把握（佐藤竜 2016）が行われている。

以上をまとめると、佐藤や森下などによって新たな検討も行われているが、現状の研究成果の根本を成しているのは 90 年代に行われた佐藤の種々にわたる検討である。この間、多くの踏査や分布調査、発掘調査が行われ、新たな窯跡や資料が確認されており、佐藤の検討についても、これらの新たな資料や知見を踏まえて、再度検討する必要がある。以下では、これまでの調査・研究の成果を踏まえながら、生産内容・分布・窯体構造などに注目して、十瓶山窯跡群における窯業生産の展開について改めて考えていく。

１. 十瓶山窯跡群の周辺地形と群構成

（１）周辺地形

十瓶山窯跡群は讃岐国の中央部にあたる阿野郡の北部に立地する。周辺地形を俯瞰すると、北に鷲ノ山や十瓶山、火ノ山から、南に鞍掛山などから丘陵地帯が伸び、これらに挟まれる形で洪積台地が広がる。この丘陵地帯や洪積台地を綾川やその支流である御寺川・富川が下刻することで、大小の開析谷がいくつも形成されている。北条池近辺で御寺川・富川と合流した綾川はそのまま北に流れていき、下流域に沖積平野を形成して瀬戸内海に注ぐ。基本的に窯は開析谷や山麓の斜面上に築かれ、とくに富川以北に集中して築かれている。

（２）群構成

佐藤は窯が築かれる自然地形に着目して、谷を中心としたグルーピングを行い、５支群 16 小支群に区分した（佐藤竜 1994）。佐藤の見解は現在まで踏襲されているが、その後の分布調査で窯跡数が増加し、新たな群の設定が必要となっている。また、瓦窯群を小支群から分離させているが、瓦窯群だけで小支群を形成する事例もあるため、瓦窯群も小支群内に組み込むことにした。

これらをもとに改めて設定を行い、佐藤のいう支群を地区、小支群を支群としたうえで、改めて整理を行った（図２）。

綾川地区　綾川本流によって形成された開析谷である。打越、下野原、庄屋原の３支群に分かれる。

鷲ノ山地区　鷲ノ山の南麓に位置し、十瓶山窯跡群の最北端の地区である。

大谷地区　十瓶山・火ノ山から綾川へと至る大規模な谷筋である。内間、丸山、庄屋池、十瓶山北麓、すべっと、かめ焼谷の６支群が存在する。

北条池地区　綾川の支流である富川・御寺川によって形成された開析谷である。北条池、陶畑、九十原、小坂池、西村、日原、藤棚の７支群に分かれる。

北山地区　富川以南の鞍掛山から東に広がる丘陵地帯で、富川やその支流によって複数の谷に分かれている。鞍掛山、飼野、森末の３支群がある。

以上、５地区 19 支群に分かれる。

２．十瓶山窯跡群における窯業生産の時期的変遷

十瓶山窯跡群は主に須恵器を焼成し、一時的に瓦も生産しながら、７世紀中葉から 14 世紀中葉までの約 700 年間にわたって存続した。佐藤は、この間に生産器種が何度も変化していることから、器種構成の変化を大画期に、指標器種の形状変化を小画期として求め、４期 16 段階に区分した（佐藤竜1993）。

しかし、佐藤Ⅱ期やⅢ期では同一時期内で器種構成が統一されているのに対して、佐藤Ⅰ－１期・Ⅰ－２期の間に器種の消失があり、また須恵器に主眼を置いているとはいえ、佐藤Ⅳ期内に瓦生産の有無という決定的な差が存在する。これらを踏まえ、器種構成の変化を大画期、指標器種の形状変化を小画期とする佐藤の見解に従いつつも、十瓶山窯跡群における生産内容とその変化について改めて検討する。

（１） 器種分類

十瓶山窯跡群では多様な器種が生産されていたが、ここでは一定量の出土数があり、かつ一定期間存在し、変化の消長を追えるものを中心に分類を行った。以下に分類案を提示する（図３・４）。

（ｉ）蓋

蓋 A　逆椀形の蓋で、天井部と体部に丸みをもつもの。杯 A に伴う。

蓋 B　口縁部にカエリをもち、乳頭状または擬宝珠つまみをもつもの。頂部は平たいものと丸みをもつものとがある。杯 Ca に伴う。

蓋 C　口縁部にカエリをもたず、下方に折り、乳頭状または擬宝珠つまみをもつもの。笠形のもの（蓋 Ca）、頂部が平らで器高が高いもの（蓋 Cb）と器高が低いもの（蓋 Cc）、口縁端部を引き伸ばしてから下方に折るもの（蓋 Cd）がある。杯 E 類に伴う。

（ⅱ）杯

杯 A　口縁部にカエリをもつもの

杯B　蓋Aを逆さにしたもの

杯C　無高台で体部を屈曲させ、口縁部に至るもの。体部上位で屈曲するもの（杯Ca）と体部中位で屈曲するもの（杯Cb）とに分かれる。

杯D　無高台で体部を斜め上に直線状に伸ばして口縁部に至るもの。体部の立ち上がりに踏ん張りを有するもの（杯Da）と外方にそのまま開くもの（杯Db）とがある。

杯E　杯Dに貼り付け輪高台を付したもの。器高が高いもの（杯Ea）と低いもの（杯Eb）に分かれる。

（ⅲ）椀

椀A　貼り付け輪高台を有するもの。体部が直線状に開くもの（椀Aa）と体部が内湾し、内面にヘラミガキ調整を施すもの（椀Ab）とがある。

椀B　平高台を有するもの。

（ⅳ）台付椀

短い脚部のもの（台付椀A）と長い脚部のもの（台付椀B）がある。

（ⅴ）鉢

鉢A　体部が内湾し、体部上位でやや直立させて口縁部に至るもの。口縁端部は無拡張。

鉢B　体部が内穹気味に立ち上がる鉄鉢状のもの

鉢C　肩の張った深い体部と「く」の字状の口縁部をもつもの

鉢D　肩が張らず、浅い体部をもち、口縁部を「く」の字状に曲げて口縁端部を摘まみ上げるもの

鉢E　体部が直線状に外部に開き、外傾する口縁端部をもつもの

鉢F　円盤状の底部外面に刺突を施し、直線的に開く深い体部をもつもの。

（ⅵ）壺

壺A　長い頸部をもつもの（長頸壺）。口縁部がやや開くもの（壺Aa）とラッパ状に大きく開くもの（壺Ab）とに分かれる。

壺B　短い頸部をもつもの（短頸壺）。口縁部がやや立ち上がるもの（壺Ba）と口縁部を直立させるもの（壺Bb）、口縁部を「く」の字状に曲げるもの（壺Bc）がある。

壺C　丸みを帯びた体部をもち、比較的短い頸部をもつもの。口縁端部を摘まみ上げるもの（壺Ca）と口縁端部を斜め下に拡張するもの（壺Cb）に分かれる。

壺D　肩が張る体部と比較的長い頸部をもち、口縁部が大きく開いて口縁端部を摘まみ上げるもの。

（ⅶ）甕

甕A　長い頸部を有する丸底のもの。

甕B　短い頸部をもつ丸底のもの。

甕C　比較的短い頸部と口縁端部を斜め下に拡張する丸底のもの。

甕D　短く開く頸部と無拡張の口縁端部をもつ平底のもの。

（２）器種の消長と大画期（表１・２）

１期　杯蓋、皿、鉢、台付椀、壺、甕、高杯、ハソウなどを生産する。指標器種は杯蓋である。杯Ａや蓋Ａといった古墳時代的器種と杯Ｂ類や蓋Ｂなどの金属器を指向する古代的な器種とが併存している。

２期　杯Ａや蓋Ａ、ハソウなどの生産が途絶し、杯蓋、皿、鉢、壺、甕、瓦などを生産する。指標器種は杯蓋である。古墳時代的様相が弱まり、古代的な様相が強くなる時期である。

３期　台付椀が生産途絶し、杯蓋、皿、鉢、壺、甕などを生産する。一部の窯では小規模ながら瓦を焼成している。指標器種は杯蓋で、５段階に分かれる。古墳時代的な器種が淘汰され、古代的な器種で統一されたことから、古代的器種構成が成立した。

４期　蓋の生産が途絶し、杯・皿・鉢・壺・甕を生産する。指標器種は杯蓋と壺で、４段階に分かれ、３期で完成した古代的器種構成が崩れている。一方、４−４期には少量ながら瓦が生産されていた可能性が考えられる。

５期　杯の生産が途絶し、椀・小皿・鉢・壺・甕・瓦を生産する。指標器種は椀・鉢・甕で、５段階に分かれる。断続的かつ単発的で、瓦陶兼業であった２〜４期のものに対して、この時期の瓦生産は基本的に瓦専焼で、継続的かつ大規模に行っている。

また、森下の検討（森下 2019）から、５−０期に瓦生産を開始したと考えられる。時期区分の指標となる須恵器の生産地資料は確認できていないが、本格的な瓦生産が始まり、これが５期の大きな特徴となることから、５期に含めた。ただし、須恵器資料がないため、暫定的に５−０期と設定する。

その後、５−１期に中世的器種構成が成立する。椀Ｂや壺Ｄに播磨地域からの影響が考えられるが、底部切り離し技法がヘラ切りのままであることから、技術を導入しながらも、従来の工人集団によって生産されていたと考えられる（佐藤竜 1993・1998）。

６期　瓦生産が途絶し、椀・皿・鉢・壺・甕を生産するが、器種の消長は５期とほぼ変わらず、基本的には５期の須恵器生産が継続している。指標器種は椀・鉢・甕で、２段階に分かれる。ただし、６−２期では生産遺構に伴う資料は確認されていない。

（３）各時期の年代観

以上、十瓶山窯跡群における窯業生産を６期 18 段階に分けた（表３）。年代観については生産地資料と消費地資料を対比させ、さらに消費地で共伴している遺物の年代観を参考にする方法を採るが、これについては佐藤による検討（佐藤竜 1993・2016）がある。

まず１期は７世紀中葉の年代が与えられる。つぎに２期であるが、これは７世紀後葉となる。３期については、３−１期が８世紀前葉、３−２期が８世紀中葉、３−３期が８世紀後葉、３−４期が９世紀前葉、３−５期が９世紀中葉に比定できる。

他方、４期であるが、４−１期が９世紀後葉、４−２期が 10 世紀前葉、４−３期が 10 世紀中葉、４−４期が 10 世紀後葉に位置づけられる。

５期は５−０期が 11 世紀前葉（森下 2019）、５−１期が 11 世紀中葉、５−２期が 11 世紀後葉、５−３期が 12 世紀前半、５−４期は 12 世紀後半が与えられる。

最後に６期であるが、６－１期が 13 世紀、６－２期が 14 世紀前葉から中葉となる。

（４）小結

ここまで、十瓶山窯跡群での生産器種とその消長、年代観についてみてきた。十瓶山窯跡群の窯業生産は６つの時期に分かれるが、より大きな視点に立つと、前期・中期・後期の３つの様相に区分することができる。

前期は１・２期で古墳時代的器種と古代的器種が混じる過渡的な様相をもつ。一方、中期は３・４期で、古代的器種構成を基調としつつも、その成立と崩壊を内包する段階といえる。最後に後期は５・６期で、中世的器種構成を基軸とし、瓦生産の有無が生じる様相となる。

３. 窯跡の分布とその変化

以下では、前期から後期にかけての窯跡の分布と変遷について検討する。この分野についても、佐藤による詳細な検討（佐藤竜1994）がなされているが、先述したように新出資料や新たな知見も現れているため、先に求めた時期区分のもと、改めて整理をしていきたい。

（１） 前期

１期は綾川地区の打越支群で１基のみ操業するが、２期には綾川地区打越支群で１基、下野原支群で２期が築かれている。このうち、下野原支群のものは瓦陶兼業窯である（図７・８）。

（２） 中期

３期　３－１期では、北条池地区北条池支群で３基の窯が築かれる（図９）。３－２期には綾川地区･北条池地区で窯が築かれ､綾川地区では庄屋原支群で２基､北条池地区北条池支群で４基、陶畑支群で１基稼働する。また、大谷地区内間支群では、明神谷灰原や田村神社東灰原で本段階の須恵器蓋が出土していることから、付近で須恵器生産を行っていた可能性が考えられ、この時期に内間支群での須恵器生産を想定した佐藤の指摘（佐藤竜1994）とも整合する（図 10)。

３－３期になると、綾川・大谷・北条池地区で生産が行われる。綾川地区庄屋原支群で２基、大谷地区の庄屋池支群で１基、北条池地区では北条池支群で２基、陶畑支群で１基、日原支群で１基確認されている。庄屋池支群のものは瓦陶兼業である（図 11)。

３－４期には、北条池地区での生産が一旦途絶え、綾川・大谷地区に窯が築かれる。綾川地区では庄屋原支群に１基、大谷地区は庄屋池支群で１基確認されている。庄屋原支群のものは瓦陶兼業である。最後に３－５期であるが、大谷地区のすべっと支群で１基、北条池地区の九十原支群で１基の計２基がある。このように、３－４～５期には生産規模が一旦縮小する（図 12・13)。

４期　４－１期は綾川・大谷地区で生産が行われる。綾川地区打越支群で１基、庄屋原支群で１基あり、大谷地区では庄屋池支群で３基、すべっと支群で２基築かれる。４－２期には、綾川・大谷・北条池・北山地区で窯跡が確認されている。綾川地区では庄屋原支群の２基、大谷地区庄屋原支群で２基、すべっと支群で５基、北条池地区の九十原支群で１基、北山地区森末支群で１基ある（図 14・15)。

４－３期になると、鷲ノ山地区で１基、大谷地区で２基、北山地区で１基の窯が築かれるにすぎない。大谷地区では、庄屋池支群で１基、かめ焼谷支群で１基、北山地区森末支群で１基確認

されている。最後に４−４期であるが、北条池地区で窯跡がみられる。内訳は九十原支群で１基、日原支群で１基である。このうち、日原支群のものは瓦陶兼業窯と考えられる（図 15・16）。

（３） 後期

５期　５−０期では、北条池地区小坂池支群で１基の瓦窯が築かれる。５−１期には、大谷・北条池地区で生産が行われる。大谷地区丸山支群で１基、北条池地区北条池支群で最大３基、西村支群で１基が確認されている。このうち、丸山・北条池支群のものは瓦窯で、西村支群は瓦陶兼業窯である。５−２期では、大谷・北条池地区で窯が築かれる。内訳は大谷地区内間支群で１基、丸山支群で１基、庄屋池支群で１基、北条池地区北条池支群で１基となる。内間・丸山・北条池支群のものが瓦窯である（図 18〜20）。

５−３期になると、大谷・北条池地区で生産活動を行う。大谷地区では、内間支群で１基、丸山支群で２基、庄屋池支群で１基、すべっと支群で１基あり、北条池地区でも北条池支群で１基、陶畑支群で１基、九十原支群で２基、西村支群で２基、日原支群で１基の窯が築かれている。このうち、内間・丸山支群のものが瓦窯で、西村・日原支群のものは瓦陶兼業窯である（図 21）。

５−４期には、鷲ノ山・大谷・北条池・北山地区で生産が行われる。鷲ノ山地区で１基、大谷地区では、丸山支群で１基、庄屋池支群で３基、すべっと支群で１基、かめ焼谷支群で１基築かれているほか、内間支群で複数基操業していた可能性が指摘されている（森下 2019）。北条池地区では、北条池支群で１基、陶畑支群で１基、九十原支群で２基、日原支群で４基あり、北山地区には森末支群で１基存在する。このうち、丸山・内間支群と庄屋池支群の１基が瓦窯である（図 22）。

６期　６−１期では、大谷・北山地区で窯が築かれている。内訳は大谷地区かめ焼谷支群で２基、北山地区鞍掛山支群で１基、森末支群で１基あるほかにも、西村遺跡で窯が築かれている。６−２期になると、西村遺跡で生産が行われている可能性があるが、生産遺構は確認されておらず、生産活動の実態は明瞭ではない（図 23〜24）。

（４） 小結

ここまで前期から後期にかけての窯跡の分布の変化についてみてきた。以下では、その概略をまとめ、各時期の特徴について検討したい（表４）。

最初に前期だが、１期は単独操業が行われるものの、２期になると、綾川地区内で３基の窯が築かれ、複数同時操業となる。しかし、生産域は綾川地区に限られ、綾川によって形成された開析谷の出口近辺で操業が行われていたと考えられる。

一方、中期では、谷を遡上して北条池地区に生産の場を移し、各地区に須恵器生産が拡大していく。３−４期以降は大谷地区が須恵器生産の中心となるが、４−３期以降は各地区での生産規模が縮小し、生産の継続性が極めて不安定となる。

また、庄屋原支群やすべっと支群など、継続して窯を築いたり、集中的に窯を構築したりする生産中核地が出現しており、佐藤のいう「継続型」「集中型」の一群（佐藤竜 1994）に相当する。これらは古代的器種構成の成立とともに、中期の窯業生産を彩るものとなるが、４−３期には消失した。

最後に後期だが、５期に大きな変化が３つ現れる。まず１つ目は、全体の分布として、須恵器窯と瓦窯で生産領域を違えるようになり（上原 1979・佐藤竜 1994）、須恵器窯と瓦窯で生産器種を分業する体制が採用される。

つぎに、５－２期までは瓦窯が多いのに対して、５－３期になると、須恵器窯が急増し、瓦窯よりも数的に優位に立つ。この傾向は５－４期により強まっており、瓦生産重視の段階と須恵器生産をより重視する段階に分かれるといえる。

最後に、内間・丸山・西村支群といった生産中核地の再出現が挙げられる。これらは５期の大部分で稼働しており、中期以上に固定的な存在である。とくに多数の須恵器窯を抱える西村支群の西村遺跡では、５－４期に建物群や粘土採掘坑、須恵器窯が急激に増加することから、須恵器窯と一体化した須恵器工人の居住集落と考えられており（佐藤竜 1996）、中期の様相とは一線を画している。

このように、５期になると生産領域の分離や須恵器と瓦の分業、より固定的な生産中核地や居住集落と一体化した生産地の登場など、中世的な要素が多くみられる。また、５－３期以降に須恵器生産がより重視されていることも重要である。とくに５－４期には窯跡数が最大となり、窯業生産の最盛期を迎える。

しかし、６期になると、瓦窯が消失し、生産規模も大きく縮小する。しかし、西村遺跡が存続しており（佐藤竜 1996）、５期からの生産の連続性は有している。

４．十瓶山窯跡群における窯体構造

十瓶山窯跡群では、４つの窯体構造を用いて様々な器種を焼成していたことが判明している（佐藤竜 1994 など）。ここでは、用いた窯体構造の変遷と生産器種との関係性を整理しながら、それぞれの性格について改めて検討する。

（１） 窯体構造（図 25）

十瓶山窯跡群で用いられた窯体構造のうち、最も一般的なものは半地下式窖窯であった。半地下式窖窯は地山を溝状に掘って窯体下半を構築し、地山側壁の上方から天井を構築するものである（窯跡研究会 2004）。

小型有牀式窯は床面に牀（畔）を構築し、燃焼室と焼成室の間に隔壁を設けるなど、瓦窯の特徴を有する。しかし、牀の上面に傾斜をつけるなど、瓦窯とは異なる点もある（佐藤竜 2000c）。

煙管状窯は円筒形の窯体中位に間仕切りを設けることで、上下に焼成室と燃焼室を分ける小型窯である（佐藤竜 1996）。

最後に有牀式窯であるが、小型有牀式窯とほぼ同じ構造を有するものの、瓦の焼成に利用される。焼成室が長い点は須恵器窯に近い形態で、須恵器工人が瓦生産にも関与していた可能性を指摘できる（佐藤竜 1994）。

（２） 窯体構造の変遷（表５）

前期　前期では窯体が確認されていない。しかし、同時期に操業していた窯跡群の状況から地下式窖窯を用いていたと想定される。

中期　この時期から半地下式窖窯を用い始める。また、４－２期になると、すべっと支群・森末支群で小型有牀式窯が出現する。とくに、すべっと支群では半地下式窖窯と小型有牀式窯が併存している（片桐𨻶編 1994）。しかし、小型有牀式窯は４－３期を最後に消失し、以降は半地下式窖窯のみでの生産となった。

後期　５期には半地下式窖窯・煙管状窯・有牀式窯が用いられる。このうち、前者２つが須恵器窯で、後者が瓦窯となる。煙管状窯は西村遺跡に限定して分布し、有牀式窯は窯跡群西部に集中する（佐藤竜 1994）。また、須恵器窯でも、５－４期以降に洪積台地上（西村遺跡）の煙管状窯と丘陵部の半地下式窖窯とで生産領域が分かれる（佐藤竜 2000c）。６期になると、瓦生産が終了し、有牀式窯が消失する。最終的には煙管状窯も失われ、半地下式窖窯のみでの生産になったと考えられる。

（３） 窯体構造と生産器種（図 26）

前期　地下式窖窯を用いて、古墳時代的器種と古代的器種を生産したと考えられる。

中期　基本的には半地下式窖窯を用いて、古代的器種構成に基づいた多種多様な器種を生産する。一方、４－２期では小型有牀式窯が登場し、杯や皿といった小型器種の集中生産を行う。とくにすべっと支群では、４－２期だけではあるが、小型有牀式窯と半地下式窖窯が併存し、小型有牀式窯で杯・皿を、半地下式窖窯で壺・甕を焼成する（國木 1993・佐藤竜 1994）。

また、すべっと支群以外の４－２期の様相をみると、小型有牀式窯である（田所）深池窯で杯・皿を、半地下式窖窯である庄屋原１号窯で壺・甕の主体生産を行なっており、支群内ではなく、地区・支群を違えて上記の焼き分けを行っている。なお、後者は破片資料のため、確証には至らないが、一定量の数量が確保されており、ある程度の実態は表していると考えられる。

つまり、すべっと支群のように１支群内で器種分業を行う場合と、地区・支群を違えて、生産器種の分業を行う場合があり、この段階に２つのあり方が存在したと考えられるのである。そして、この生産形態の変化は窯跡群全体に起きた現象だといえ、資料上の制約は残るものの、この生産体制は小型有牀式窯が消失した４－４期でも維持されたと想定される（図 27）。

後期　５－０期から有牀式窯で瓦生産を行なう一方、５－１～２期の半地下式窖窯では瓦陶兼業や多様な器種を焼成するなど、多様性に富む。西村遺跡でも黒色土器椀を焼成するが、煙管状窯を用いたかは不明である（佐藤竜 2000c）。

５－３期には半地下式窖窯で甕を主体的に生産する事例が現れ、器種別分業が進展するも、なお瓦陶兼業などを示す半地下式窖窯もあり、西村遺跡でも煙管状窯は確認できない（佐藤竜 1996）。しかし、５－４期になると、西村遺跡で多くの煙管状窯が出現して、椀・皿・鉢の生産を行い（佐藤竜 1996）、半地下式窖窯では甕主体の生産に完全に切り替わる（佐藤竜 1994）。そして、有牀式窯では５期以来、瓦生産を行っていることから、この段階に支群別・窯体構造別の器種別分業体制が確立した（佐藤竜 2000c）。

６期に有牀式窯が消失するが、煙管状窯・半地下式窖窯での生産は続けられた。６－１期の窯数は急激に減少しているが、半地下式窖窯での甕生産がより集約的になったという評価もある（佐藤竜 1994）。しかし、６－２期には煙管状窯も消失し、半地下式窖窯も確認されていなことか

ら、全体の様相は不明瞭となっており、この段階に生産活動を停止したと考えられる。

（４） 小結

ここまで十瓶山窯跡群で用いられた窯体構造の変遷と生産器種との関係性についてみてきた。この中で大きな画期となるのは４−２期と５期である。

４−２期に小型有牀式窯が登場し、小型有牀式窯で杯・皿を、半地下式窖窯で壺・甕の集中生産を行なったことは、半地下式窖窯で多種多様な器種を生産していた前段階までのものとは一線を画している。この生産形態を器種別分業ではなく、半地下式窖窯の生産を小型有牀式窯が補助するものと評価されることもあるが（佐藤 2000c）、比較されている５−４期における器種別分業でも、窯体構造によって生産器種が峻別されているわけではない。つまり、４−２期における生産形態を器種別分業の範疇で捉えて問題ないと考えられる。

そして、この生産形態の変化は窯跡群全体に適用されており、特定の支群だけではなく、十瓶山窯跡群そのものが器種別分業を志向したといえ、ここに器種別分業体制の萌芽を看取することができる。この体制は小型有牀式窯が消失した後も維持され、少なくとも４−４期までは継続している。

５−０〜１期ではこの体制は崩れているが、瓦の専焼が始まり、中世的器種構成が成立すると、器種別分業が段階的に進展していき、最終的には５−４期により完成度の高い中世的な器種別分業体制が確立された。

５．十瓶山窯跡群における窯業生産の特質

ここまで十瓶山窯跡群での生産活動について、生産内容・分布・窯体構造の視点から概観し、古代への過渡的な様相を示す前期、古代的様相が成立し、その崩壊と脱却の動きを見せる中期、そして中世的様相が確立される後期という特徴がつかめてきた（表６）。以下では、これまでの検討で得られた知見を踏まえつつ、視点を広げながら、十瓶山窯跡群の窯業生産の特質について検討する。

（１） ３期における生産規模の拡大

前期を通じて、讃岐国内 11 郡のうち９郡に窯跡群が形成されており（佐藤竜 1997）、このような分布状況は「一郡一窯」的なあり方（宇野 1994）だといえる。しかし、３期になると、各地の窯跡群が急速に衰退し、「一郡一窯」的分布が崩れ、十瓶山窯跡群に生産がほぼ集約されるようになる（松本・岩橋 1985 など）。同時に、十瓶山窯跡群では生産規模が拡大していく（図 28）。

この背景には３期に成立した讃岐国府の存在が考えられる。国府は綾川を伝って十瓶山窯跡群の北方約４ｋｍの地点に展開しており、国府の後背地に立地すると言って差し支えない。また綾川の河口部には国府の外港である国津が設置されたと考えられ（信里編 2019）、国府の管轄のもと、製品の搬出入が行われた。さらに言えば、国津まで製品が運ばれる前に国府で製品のチェックや貯蔵なども行われていた可能性も想定できる。

つまり、３期以降の十瓶山窯跡群は国府の後背地に展開した窯業生産地であり、綾川を介して国府だけでなく国津とも直結した製品搬出の上でも有利な立地を占めていた窯跡群だというこ

とが分かる。また、３期における国府の成立とともに、国府の後背地に位置する十瓶山窯跡群に生産が集約され、規模も拡大していく背景として、古くから指摘されているように（渡部 1980 など)、やはり国府による多大な干渉を想定する必要があり、窯跡群の維持・管理や製品の搬出にも国府との密接な関係があったと考えられる。「一郡一窯」的なあり方を示し、国内に数ある窯跡群のひとつに過ぎなかった前期と異なり、中期では国府の庇護のもと発展した窯跡群と評価できる。

（２） 中世窯への転換

中期では、古代的器種構成のもと、半地下式窖窯で多種多様な製品を焼成する形態を採っていた。古代的器種構成が変質した４−２期には小型有牀式窯が出現し、器種別分業へと生産形態の刷新が行われ、器種別分業体制の萌芽が見て取れた。

５期になると、有牀式窯が登場し、瓦の専焼が行われ、大量生産が始まる。その後、生産中核地が再度形成され、須恵器窯と瓦窯で生産領域が分離し、中世的器種構成が成立する。５−３期には、半地下式窖窯でも壺・甕の集中生産を始めるものが出現する。しかし、黒色土器を生産したり、依然として旧来的な生産を維持したりする半地下式窖窯も存在しており、器種別分業の進展はみられるものの、なお完成には至らない。

一方、５−４期になると、西村遺跡で煙管状窯が多く築かれ、椀・皿などの集中生産を行う。また、半地下式窖窯も壺・甕の集中生産を行うもので占められ、窯体構造別の器種別分業体制が確立される。ほかにも、西村遺跡のような窯と工人の居住集落が一体化したより固定的な生産中核地が登場している。

さて、中世窯業の一般的な条件としては、①日常雑器（椀・皿・鉢など）の集中生産、②製品の広域流通（商品流通）が挙げられる（楢崎 1965)。このうち、①については、５期を通じて進展していき、５−４期に確立される。②にかんしては、11 世紀後半から甕が主に経筒外容器として西日本へ広く流通するが、特産品流通としての側面が強い（片桐 1992・佐藤亜 2016)。ただし、少なくとも５−４期での甕の生産量は飛躍的に増大しており、そのすべてが経筒外容器や国内需要のみで消費されたとは考え難く、この段階には西日本各地に民間雑器として商品流通していたと想定される。

このように、十瓶山窯跡群では段階的に中世窯へと進展していき、５−４期に中世窯へと転換したのである。

（３） 他地域との比較からみた十瓶山窯跡群

讃岐以外に、古代から中世まで連綿と須恵器生産を続けた地域には丹波、播磨、備前、尾張などが挙げられる（図 29)。ここでは、その中でも様相が比較的明らかになっている丹波、播磨、尾張を例に挙げ、十瓶山窯跡群の性格をさらに探ることとする。

上記の地域でも、９世紀までは十瓶山窯跡群と同様、地下式窖窯や半地下式窖窯を用いて多種多様な器種を焼成するが、９世紀以降は各地域で生産活動が変容していく。

丹波では、篠窯跡群（亀岡市）で長期的な生産が行われる。９世紀後葉に施釉陶器を模倣した須恵器である瓷器系器種の生産を始め、９世紀末には緑釉陶器生産と緑釉陶器焼成用の窯であ

る小型三角窯を導入する。10 世紀後葉になると、鉢の集中生産と瓦の生産を行ない、以降は瓦主体の生産となった。

播磨では、9 世紀後葉に瓷器系器種の生産を相生窯跡群（相生市）で開始し、9 世紀末から 10 世紀初頭に成立した神出窯跡群（神戸市）で、10 世紀前葉に甕の集中生産とそれに応じた窯の大型化が看取できる。10 世紀中葉には底部切り離し技法に糸切り技法を導入し、11 世紀以降は瓦の大量生産を行なう。その後、12 世紀前半に器種別分業体制を播磨 1 国規模で整え、12 世紀後半に東播系須恵器鉢が広域流通圏を形成したことで、中世窯業を確立した。

尾張においては、9 世紀前半に猿投窯（名古屋市など）で施釉陶器生産を開始するが、本格的になるのは 9 世紀後半である。その後、とくに灰釉陶器生産が発達し、それをもとに山茶椀の生産と周辺地域への供給が始まる。その後、常滑窯（常滑市）などが開窯し、13 世紀前半に全国的な広域流通圏を獲得した。

これらの地域と比較した時、十瓶山窯跡群では器種別分業や瓦の大量生産など生産方針の転換を他地域にやや遅れるかほぼ同時になる形で行っていることが分かる。一方で、10 世紀までは、器種構成や製作技術の面では、他地域のような変化はみられず、保守的な側面をみせる。11 世紀になると、中世的器種構成が成立し、椀 B や壺 D といった播磨地域から導入したと思われる器種を生産するなど、器種構成に変化が現れるが、製作技術、とくに底部切り離し技法は一貫してヘラ切りであり、依然として保守的な性格を有している。この保守的な性格はこれまでの見解（渡部 1980・佐藤 1993）と相違ない。

つまり、十瓶山窯跡群は生産方針の転換については他地域と同様、敏感に反応しているが、器種構成や製作技術といった須恵器生産の面では保守的な性格が強い窯跡群だといえる（表 7）。

（4） 小結

以上、十瓶山窯跡群における前期から後期にかけての特質について触れた。以下では、その概略について述べたい。

まず、前期は「一郡一窯」的なあり方を示す時期で、生産内容も 7 世紀によくみられるものとなっている。つぎに、中期は国府の庇護のもと発展した窯業生産地であったと評価した。ただし、その様相は 3 期と 4 期で異なり、3 期は古代的様相の成立、4 期は古代的様相の変質とそれに対応した生産形態の刷新・維持が看取できる。

また、後期は中世窯業へ転換する時期となる。これは段階的に行われており、完全に転換するのは 5－4 期（12 世紀後半）である。

また、他地域と比較すると、十瓶山窯跡群は生産方針の転換には積極的だが、器種構成や製作技術の刷新には消極的で保守的な性格を有する窯跡群だと考えられるのである。

【参考文献】

岩橋　孝（編）1991『かめ焼谷 1 号窯−香川県綾歌郡綾南町陶十瓶地区工業団地造成に伴う須恵器窯跡の発掘調査−』香川県教育委員会

上島　亨 2010『日本の中世社会と王権』名古屋大学出版会

宇野隆夫 1985「後半期の須恵器」『史林』第 67 巻第６号 史学研究会（後に、1989『考古資料にみる古代の中世の歴史と社会』 真陽社 に所収）
宇野隆夫 1994「一郡一窯体制について」『北陸古代土器研究』第４号 北陸古代土器研究会
上原真人 1978「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14 元興寺文化財研究所
上村和直 1994「後期の瓦」『平安京提要』古代学協会・古代学研究所
大砂古直生（編）1983『十瓶山西２号窯・大師堂池１号窯－香川県住宅供給公社による宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査－』綾南町教育委員会
植田　広 1991「庄屋原２号窯採集の資料」『研究輯録』Ⅰ　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
植田　広 1992「北条池１号窯跡採集のヘラ記号のある須恵器」『研究輯録』Ⅰ　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
小野秀幸（編）2010『林が谷池窯跡』綾川町教育委員会
小野秀幸（編）2010『小坂池１号窯跡・小坂池２号窯跡・小坂池３号窯跡』綾川町教育委員会
尾野善裕 2015「灰釉陶器生産地域の拡大～猿投窯からみた駿遠地域の窯」『灰釉陶器生産における地方窯の成立と展開』第３回東海土器研究会資料集 東海土器研究会
香川県教育委員会 1968『香川県陶邑古窯跡群調査報告』
片桐節子（編）1994『十瓶山窯跡群すべっと支群-綾南町総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 - 』綾南町教育委員会
片桐孝浩 1992「古代から中世にかけての土器様相」『川津元結木遺跡』中小河川大東川改修工事（津の郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　財団法人香川県埋蔵文化財調査センターほか
北野博司 2007「律令国家転換期の須恵器窯業」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 134 集 国立歴史民俗博物館
北山健一郎 1993「丸山瓦窯跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成４年度』香川県教育委員会
國木健司 1990「十瓶山窯跡群」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成元年度』香川県教育委員会
國木健司 1993「すべっと窯跡群」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成４年度』香川県教育委員会
五所野尾亮 1997「丸山窯跡（３号・７号・８号窯)」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度』香川県教育委員会
坂本賞三 1985『荘園制成立と王朝国家』塙書房
佐藤亜聖 2016「東播系須恵器編年研究の現状」『土器編年研究の現在と各時代の特撮－須恵器生産の成立から終焉まで－』考古学研究会関西例会 200 回記念シンポジウム 発表要旨集 考古学研究会関西例会
佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『考古学論叢』関西大学考古学研究室開設四拾周年記念　関西大学考古学研究室
佐藤竜馬 1994「十瓶山窯跡群の分布に関する一試考」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅱ』　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
佐藤竜馬 1995「綾南町庄屋原２号窯跡採集の刻印須恵器について - 十瓶山窯跡群の須恵器とその研究課題（二）－」『香川史学』第 15 号 香川歴史学会
佐藤竜馬 1996「西村遺跡の再検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅳ』　財団法人香川

県埋蔵文化財調査センター
佐藤竜馬（編）1996『綾南奥下池南遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告 第 19 冊　香川県教育委員会
佐藤竜馬 2000a「「西村型土器椀」の系譜」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅷ』　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
佐藤竜馬 2000b「第５章第１節　高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地遺跡Ⅳ　第１分冊』空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第４冊　香川県教育委員会
佐藤竜馬 2000c「讃岐における平安期の土器研究」『中近世土器の基礎研究 XV　平安時代の土器・陶磁器研究』日本中世土器研究会
佐藤竜馬 2016「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業（１）　９世紀後葉～11 世紀前葉の供膳器種」『平成 26 年度香川県埋蔵文化財センター年報』香川県埋蔵文化財センター
沢井静芳・六車　功（編）1980『西村遺跡』一般国道 32 号線綾南バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　香川県教育委員会
塩崎誠司 2000「平松池窯跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 10 年度』香川県教育委員会
髙橋照彦 1995「平安期緑釉陶器生産の展開と終焉」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 60 集
高橋照彦 2016「平安時代須恵器の研究現状」『土器編年研究の現在と各時代の特撮－須恵器生産の成立から終焉までー』考古学研究会関西例会 200 回記念シンポジウム 発表要旨集 考古学研究会関西例会
高橋照彦 2021「平安時代における施釉陶器・須恵器の生産と流通-篠窯を中心に-」『考古学ジャーナル』761 号　ニューサイエンス社
田中 琢 1967「古代・中世における手工業生産の発達（４）畿内」『日本の考古学』Ⅵ歴史時代（上） 河出書房
田村久雄・渡部明夫・町川義晃 1980「綾南町陶窯跡群採集の須恵器」『香川史学』第９号 香川歴史学会
田村久雄・渡部明夫 1986「綾南町陶窯跡群採集の須恵器（二)」『香川史学』第 15 号 香川歴史学会
田村久雄・渡部明夫・渡邊　誠 2008「陶（十瓶山）窯跡群の瓦生産について（１)」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅳ』香川県埋蔵文化財センター
田村久雄古稀記念会 1997『十瓶山』田村久雄氏古稀記念文集
中山尚子・佐藤竜馬 1998「北条池１号窯跡採集の刻印須恵器」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅵ』　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
楢崎彰一 1965「古代末期の窯業生産」『日本史研究』79 号 日本史研究会
信里芳紀（編）2002『小谷窯跡・塚谷古墳』高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　香川県教育委員会
信里芳紀 2007「府中湖崩壊防止工事」『埋蔵文化財試掘調査報告 XX　香川県内遺跡発掘調査』　香川県教育委員会
信里芳紀（編）2019『讃岐国府跡Ⅱ』香川県教育委員会
菱田哲郎 1996『須恵器の系譜 歴史発掘 10』講談社
菱田哲郎 2005「須恵器の生産者 - 五世紀から八世紀の社会と須恵器工人 - 」『列島の古代史』４ 人と物の

移動 岩波書店
廣瀬常雄（編）1981『西村遺跡Ⅱ』国道 32 号線綾南バイパス建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査　香川県教育委員会
廣瀬常雄（編）1982『西村遺跡Ⅲ』国道 32 号線綾南バイパス建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査　香川県教育委員会
廣瀬常雄 1983「十瓶山窯跡群（第３次）」『香川県埋蔵文化財調査年報』昭和 57 年度 香川県教育委員会
松本考古学研究所（編）2000『田所深池窯跡』県営ため池等整備事業（再編総合整備形）綾南南部地区工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業Ⅰ　綾南町教育委員会
三好勇太（編）2016『丸山窯跡』小規模小売店建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 株式会社石井・綾川町教育委員会
森　格也 2001「北条池改修」『埋蔵文化財試掘調査報告 XX　香川県内遺跡発掘調査』　香川県教育委員会
森　格也 2002「北条池瓦窯跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 12 年度』香川県教育委員会
森　浩一・伊藤勇輔 1971「香川県綾南町十瓶山北麓窯跡調査報告」『若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』同志社大学文学部考古学調査報告第４冊
森内秀造 1986「平安時代の窯業生産−播磨地方の須恵器生産を中心に−」『歴史における政治と民衆』日本史論叢会
森内秀造 2015「神出窯須恵器の生産地編年の再検討にむけて」『中近世土器の基礎研究』26 日本中世土器研究会
森内秀造・池田征弘編 2011『神出窯跡群Ⅲ』兵庫県教育委員会
森内秀造・望月精司 2010 須恵器窯の基本用語整理と構造分類」『古代窯業の基礎研究 - 須恵器窯の技術と系譜 - 』真陽社
森下英治（編）2016『丸山窯跡』水道局第３投棄場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 香川県教育委員会
森下英治 2019「丸山窯跡再考」香川県埋蔵文化財センター考古学講座第 49 回発表資料
渡部明夫 1980「讃岐国の須恵器生産について」『古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念　鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会
渡部明夫ほか 1983「打越窯跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』昭和 57 年度 香川県教育委員会
渡部明夫ほか 1997「打越窯跡出土須恵器について」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅴ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
渡部明夫 2008「陶（十瓶山）窯跡群における初期の瓦生産と讃岐国分寺瓦屋」『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室 50 周年記念論文集刊行会
渡邊　誠 2009「地方における有牀式平窯の受容と展開−讃岐国の事例から−」『香川考古』第 11 号　香川考古刊行会
吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』真陽社